

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2012年 8月 19日

派遣者氏名（専門分野）	津田雅之（文化表現論・比較文学）
-------------	------------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	ヨーロッパの体現者クルティウスのスペイン受容をめぐる ーカルデロン、ウナムーノ、オルテガを中心にー
-------	--

派遣期間

2012年6月20日 ～ 2012年7月4日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問研究機関	スペイン	ビルバオ	デウスト大学	アシエル・アルトゥーナ（デウスト大学講師）
	スペイン	マドリッド	オルテガ財団、スペイン国立図書館	ホセ・ラサーガ・メディーナ（ロペ・デ・ベガ学院教授）、アントニオ・デ・ムルシア・コネサ（アリカンテ大学准教授）
	スペイン	アルマグロ	国立演劇博物館図書室	テレサ・デル・ポゾ・アロヨ（国立演劇博物館司書）

派遣先で実施した研究内容

①ユーロカルチャープログラムの一環として開催された国際会議に参加

EU圏内の大学間での大規模な人的交流を図るエラスムス計画におけるエラスムス・ムンドゥスの中のユーロカルチャープログラムに、大阪大学大学院文学研究科は域外パートナーとして参加している。派遣者は平成24年度、文学研究科国際連携室エラスムス・ムンドゥス部門のリサーチ・アシスタントを担当しており、ユーロカルチャープログラムにおいてコンソーシアムを構成している大学に所属する研究者達とともに、スペインのビルバオで6月22、23日に開催された国際会議 *How does Europe engage with cultural citizenship?* に参加し研究発表を行った。

23日の18:00からのエクスカージョンでは、ユーロカルチャープログラム運営委員会のためにビルバオに出張していた大阪大学大学院文学研究科の望月太郎先生（現代思想文化学）とマシュー・バーデルスキー先生（日本語学）とともにグッゲンハイム美術館を見学した。会議の中でもこのグッゲンハイム美術館のディレクターであるファン・イグナシオ・ビダルテ氏による講演があり、学生からグッゲンハイム美術館の位相は一昨年オープンしたメッスのポンピドゥーセンター分館に近いのではという質問があった。しかし、かつての工業都市を現代建築や現代美術によって甦らせたという意味では、ドイツのエッセンにむしろビルバオに近いのではないかと派遣者は、グローニンゲン大学のイネス・メゲンス先生と話し合った。

今回の会議のテーマがヨーロッパの文化的市民性であるのは、主催者のデウスト大学のアシエル・アルトゥーナ先生がアイルランド文学を専門とする文学研究者であるために、彼は社会科学の

分野を中心とする EU 研究に一石を投じたかったからなのではないかと派遣者には思われた。発表した 16 名のうち、半数が社会科学の研究者で、残りの半数が人文科学の研究者であったが、学際的アプローチを試みる発表がいくつか見られた。派遣者は、休憩時間などでは様々な研究者と欧州統合に関して、意見を交わす機会を持つことができた。例えば、派遣者は、グローニンゲン大学のマルフリート・ファン・デア・ワール先生の発表”Welcome to Europe: the art of conflict”で取り上げられたクルド人の難民を主題としたフランス映画『君を思って海をゆく』を派遣者は日本公開時に劇場で見ていたため、発表後に、この映画で批判されているサルコジの移民政策に関して彼女と議論した。

派遣者は、”Curtius’s Awareness of a European Citizen through his Relationship with Unamuno and Ortega”と題した発表を行ったが、ビルバオの郷土知識人ウナムーノを扱ったことをバスク人であるアルトゥーナ先生はとても喜んでくれた。

②クルティウスのスペイン受容をめぐる資料調査

多くの国がひしめき合う EU が世界に誇るべきものは、多言語主義あるいは多文化主義であることは間違いないだろう。しかし、比較文学研究の分野でもヨーロッパ全体を見据えた研究というのはまだ十分になされていない。こうした状況において、ヨーロッパ文学という理念を説いた批評家・文献学者であるエルンスト・ロベルト・クルティウスの仕事を再考することは大きな意味を持つに違いない。アルザスで育ったクルティウスが独仏関係に敏感なのは当然である。しかし、その主著『ヨーロッパ文学とラテン中世』(1948) や『ヨーロッパ文学評論集』(1950) においてスペイン文学にも注目したところにクルティウスの独自性がある。派遣者は今回のスペイン滞在の後半では、クルティウスのスペイン受容をめぐる資料調査を行った。

派遣者は文献学者として知られるクルティウスの批評家としての仕事に着目した博士論文を構想中である。その中で 1 章割く予定のオーストリアの文学者ホフマンスタールにとって重要な劇作家であったカルデロンの調査をアルマグロの国立演劇博物館及びマドリッドのスペイン国立博物館で試みた。

その主著『大衆の反逆』(1929) において欧州統合の思想を唱えたオルテガは、現代の EU 研究においても言及されることが多い人物である。相互に影響を与えあった二人のヨーロッパ人であるクルティウスとオルテガの関係をめぐり調査をマドリッドのオルテガ財団で行うとともに、この財団の学術顧問であるホセ・ラサーガ・メディーナ先生と面会した。

クルティウスのスペイン受容をめぐる去年出版された研究書 *Ernst Robert Curtius. Escritos de humanismo e hispanismo* の編著者であるアリカンテ大学のアントニオ・デ・ムルシア・コネサ先生は 3 月下旬にこの単行本を派遣者の自宅に郵送してくれただけでなく、派遣者との面会のために多忙のなか、アリカンテからわざわざマドリッドまで来てくれたのである。この 2010 年に *Crítica, retórica y mediación en la obra de Ernst Robert Curtius. Un estudio sobre las relaciones entre humanismo y filosofía en el siglo XX* と題したクルティウスに関する博士論文を提出したアントニオ・デ・ムルシア・コネサ先生とは約 4 時間にわたり非常に有益な議論をすることができた。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

ビルバオでの研究発表では、多言語（英語・スペイン語）による研究発表を初めて行った。オルテガの引用部分をスペイン語原文で行い、スペイン語表現も交えた発表にしたことが、スペイン人の研究者達やスペイン語を理解する研究者達からは好評であり、EUの多言語主義の現場に触れる機会となったと思う。この成果を活かして、多言語で作品を発表する作家・多和田葉子が基調講演を務める2012年10月18日から20日にかけてパリで開催される国際会議"L'extraterritorialité des langues, littératures et civilisations : bilans et perspectives"で、派遣者は仏語・伊語・独語による多言語で研究発表をする予定である。

この研究発表の後半部分では、『大衆の反逆』における欧州統合の思想をシュペングラー『西洋の没落』からの影響を中心に論じたが、ヴァレリー『精神の危機』やフッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』を題材としたルーマニアの新ヨーロッパ大学のタマラ・カラウス先生の発表"Collapsing Europe? – Europe and the Discourses of Crisis"とは論点が重なっており、彼女の発表からは啓発されることが多かった。

国立演劇博物館図書室では過去にアルマグロで開催されたカルデロンに関する国際会議を元にした論文集などを精読し、カルデロンを当時の経済や外交や内政から分析したものから多くを学んだ。また、外国におけるカルデロン受容をテーマにした大部の研究書は比較文学研究の側面から有益であった。ただ、滞在直後にアルマグロで開かれた演劇祭とは日程が合わず、カルデロンの実際の上演に接することはできなかったのは残念である。マドリッドの国立図書館ではカルデロンの『世界大劇場』の2006年の上演のDVD、『人生は夢』の1966年の上演のDVDを閲覧し、聖体神秘劇に関する理解を深めることができた。

マドリッドのオルテガ財団では受入研究者であるホセ・ラサーガ・メディーナ先生から財団全体を案内してもらおうとともに、オルテガ研究の中心雑誌 *Revista de Estudios Orteguianos* での彼の連載について話を聞いた。オルテガ財団はオルテガの著書の世界各国での翻訳書やオルテガに関する研究書や学位論文が揃っており、その中から派遣者は *Nemesio González Caminero* の著書などを複写した。

クルティウスの専門家であるアントニオ・デ・ムルシア・コネサ先生とは、クルティウスに関する様々なトピックについて議論をすることができ、また帰国後もEメールによる学术交流を続けている。マドリッドで面会する前にお互いの論文を送りあっていたため、意思疎通は容易であった。面会中には彼が編集に関わっているスペインの雑誌 *Res Publica. Revista de Filosofía Política* への投稿を強く勧められた。

派遣後の研究発表の予定

ビルバオでの研究発表は、国際会議を元にした論文集に投稿する予定である。また、ビルバオでの研究発表と同じように2012年10月の国際会議"L'extraterritorialité des langues, littératures et civilisations : bilans et perspectives"では、多言語による研究発表をすることになるだろう。

今回の資料調査を生かしたクルティウスのオルテガとの関係をめぐる研究発表も行いたいと思っている。これについては、2013年7月にパリで開催される国際比較文学学会に発表のためのプロポーザルをすでに提出している。